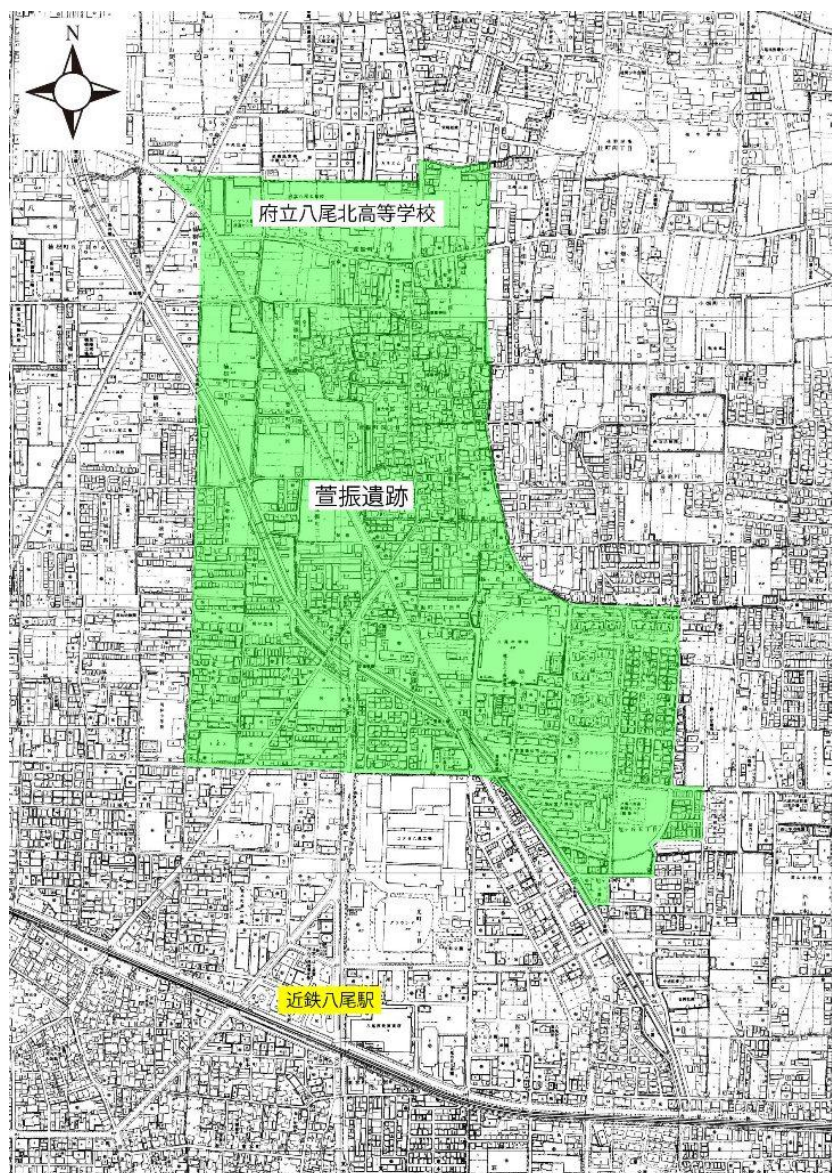


学校に眠る遺跡（八尾北高等学校、萱振遺跡）

八尾北高等学校と萱振遺跡

八尾北高等学校は、大阪府立第 146 高等学校（仮称）として、昭和 56（1981）年に大阪府議会で設立が議決されました。昭和 57（1982）年に八尾北高等学校と名称が決定し、昭和 58（1983）年には、八尾市柏村町の旧八尾市立清友高等学校跡の仮校舎において授業を開始しました。その間、八尾市萱振町 7 丁目に用地を取得し、本校舎の建設を計画しました。ところが、校舎建設に先立って埋蔵文化財の試掘調査が昭和 57（1982）年 12 月に実施されると、溝や柱穴・足跡などの遺構が検出され、多数の弥生土器も出土したことから、遺跡の存在が明らかとなりました。

新規発見された遺跡は、萱振遺跡と命名され、急遽、発掘調査が昭和 58（1983）年から昭和 62（1987）年まで実施されました。



■ 萱振遺跡位置図

学校を掘る

萱振遺跡は、八尾市萱振町に所在する集落跡です。標高約6メートルの沖積地上に立地し、遺跡の範囲は、八尾北高等学校が北端で、東西970メートル南北1340メートルです。

昭和58(1983)年から昭和62(1987)年に行われた発掘調査で、縄文時代から中世に及ぶ各時代の遺構と遺物が発見されました。

この時の調査では、弥生時代前期の自然河川中から磨滅した弥生土器と縄文時代晩期の土器片が少量出土しましたが、遺構はありませんでした。上流の遺跡から流されてきたものと思われます。

八尾北高等学校の地に人々の生活のあとが認められるのは、弥生時代中期からです。水田跡が検出され、畦畔と多数の人の足跡が検出されました。

弥生時代後期になると、住居跡・井戸・土坑・溝が検出され、人々がこの地に住み始めたことが窺えます。

住居跡は17棟確認されましたが、掘立柱建物ばかりなのが特徴で、一部の柱穴には、径15センチメートルほどの柱が残っていました。

溝からは、多量の完形品を含む弥生時代後期の土器が出土し、当時は大変な貴重品であった銅剣や銅鏡も出土しました。

古墳時代初頭には方形周溝墓群や井戸・大溝が検出され、この地は墓域となっています。

方形周溝墓は、4基検出され、一辺11メートルから17メートルのものでした。マウンドは削平されていて、埋葬主体部は残っていませんでしたが、唯一、周溝の外側で組み合せ式木棺墓が検出されました。

古墳時代前期では、萱振1号墳と命名された古墳が検出されました。

一辺約27メートルの方墳で、幅約5メートルの浅い周濠を伴っています。

埋葬主体部は後世に削平され、残っていませんでしたが、墳丘の一段目のテラスには、朝



■ 萱振1号墳（府指定史跡）全景

顔形埴輪と鱗付円筒埴輪が 0.8 メートルから 1 メートルの間隔で並べられていました。周濠からは、靱・家・盾・甲冑・蓋などの形象埴輪が多数出土しました。靱形埴輪（ゆきがたはにわ）は、復元すると高さ 1.8 メートルになり、これは日本最大のもので、とても優美なものです。古墳時代中期・後期から飛鳥時代にかけては、多少土器が出土するものの目立った遺構は認められません。しかし奈良時代になると、主軸を東西南北に合わせた建物跡が 10 棟以上も検出され、人々が再びこの地で活動を始めます。倉庫を含む建物群の中心付近に、井戸が 1 基検出されました。それは井戸枠に刳船（くりぶね）を転用した珍しいものでした。平安時代には顕著な遺構は認められませんが、鎌倉時代になると 38 基に及ぶ井戸や条里遺構と考えられる大溝や多数の柱穴などが検出され、大きな集落のあったことが分かりました。井戸の中には、曲物を井戸枠に使用したものや、上部を板材や竹で囲うもの、近くの西郡廃寺から運んだと考えられる瓦片を積み上げたものなど様々な種類のものがありました。室町時代以降は、遺物もほとんど出土せず、水田・畑など耕作地に変っていた様子です。

萱振 1 号墳

昭和 58（1983）年 6 月、萱振遺跡の発掘調査が始まりました。周囲の田圃より一段高い畑の表土をバックホウで掘り始めた考古学技師は、表土の下からいきなり円筒埴輪が 3 つほど一列に並んで出てきて、「どうやらこれは古墳らしい」と分かった時、身ぶるいするほど興奮したそうです。すぐに手掘り作業に切り替えて、表土をはぎとったところ、古墳の形は方形で、北側と西側には 10 数本の円筒埴輪が並んでいることも分かりました。普通、古墳と言えば、丘陵や山の上から見つかることが多く、河内平野のような低地での発見例は、当時、極めて少なかったことから、「まさか、いきなり、表土の下から古墳が出てくるとは」、と非常に驚いたそうです。その後、河内平野でも、続々と古墳が見つかり、現在では 270 基ほど見つかっています。そのほとんどは、沖積地にあって、土砂や粘土で埋まっているので、埋没小古墳と呼ばれたりしています。確かに、河内平野で発見される古墳は、いずれも小さく、大きいものでは、大阪市にある径約 55 メートルの塚ノ本古墳（円墳）や同じく径約 47 メートルの一ヶ塚古墳（円墳）、八尾市にある径約 33 メートルの中田古墳（円墳）、守口市にある全長約 30 メートルの梶 2 号墳（帆立貝式古墳）などがある程度です。河内平野で発見される古墳のほとんどは小方墳で、萱振 1 号墳が一辺約 27 メートルと最大です。なお、最小のものは、大阪市城山遺跡で一辺 3 メートルの方墳が 2 基発見されています。萱振 1 号墳の特徴は、何と言っても埴輪にあります。高さ 105 センチメートルの鱗付（ひれつき）円筒埴輪や朝顔形埴輪がずらっと並び、丹塗りの靱形埴輪をはじめ、高床式入母屋造や切妻造の家形埴輪・盾・甲冑・蓋（きぬがさ）

形埴輪などの形象埴輪が多数並べられていたと考えられています。



■ 萱振1号墳出土鱗付円筒埴輪

もちろん、これらの精巧に薄く作られた埴輪は、熟練の専門工人達の手によるもので、萱振遺跡で作られたものではありません。

埴輪が作られたのは、萱振遺跡の8キロメートルほど南にある藤井寺市「土師里」です。そこでは、埴輪作り集団である土師部がいて、巨大前方後円墳用に、組織的に埴輪を作っていたことが分っています。

萱振1号墳発掘当初も墳丘規模に対し、埴輪があまりにりっぱなことから、そのギャップに調査担当者一同も首をかしげたものだったのですが、その後の発掘諸例を見てみると、逆に、小規模な古墳であつてもりっぱな埴輪を入手できると考えられるようになりました。つまり、土師里の埴輪工房では、巨大古墳用の大きな仕事をメインに行っているのですが、小古墳にも対応してくれる、そんな組織であつたのかなと考える訳です。死者のために古墳を作りたい、埴輪を並べたいという依頼者の求めには、真摯に対応してくれる、そんな組織だったのかなと考える訳です。

そう考えると、萱振1号墳の南西 1.1 キロメートルに発見された八尾市美園古墳は、一辺7メートルの方墳ですが、多数の壺形埴輪と共に重要文化財に指定された精巧な家形埴輪が出土しました。

大阪市高廻り2号墳は径20メートルの円墳ですが、長さ128センチメートルのこれも重要文化財に指定された船形埴輪が出土した例も無事解釈できる訳です。

萱振1号墳は、古墳時代前期末の古墳ですが、その後の中期・後期になつても、河内平野の古墳には、土師里を含めた南河内の埴輪が運ばれているので、その供給システムに変更はなかつたもようです。

萱振1号墳は、河内平野で発見された方墳の中では最大のもので、保存状況も良好だったことから、関係者の努力によって、現地で保存・復元されました。また、大阪府でも貴重な文化財であることから、古墳は府史跡、靱形埴輪は府有形文化財に指定されました。



■ 復元された萱振1号墳



■ 萱振1号墳出土靱形埴輪

井戸枠に転用された古代船

河内平野では、その表層部分は、旧の大和川や淀川が運んできた砂・泥のため、井戸を掘っても、すぐに崩れてしまいます。

きれいな飲料水確保のためには、どうしても枠材が必要です。で、古代の人がどうしたかというと、廃船を利用しました。手順は、こうです。

まず、廃船となった大型の刳船の船首と船尾部分を切断します。その後、胴体部を2つに切ります。それを井戸用に掘った穴の中に抱き合わすように直立させ、縄で縛ったり、かすがいで止めた後、枠外をしっかりと土で埋めて、井戸の完成です。

廃船となった刳船は、ほとんどが杉で作られているため、水に強い樹木の特性を良く知った上での転用と考えられます。

古代の河内平野では、現在までに、こうした刳船を転用した井戸枠が 12 遺跡 24 例ほど見つかっています。

一方で、古代人がそうしたリサイクルを行ってくれた結果、古代の河内平野の中の潟湖や河川あるいは大阪湾を行き来していた船の姿が明らかになってきたのも事実です。

古墳時代前期から平安時代前期までの丸木船・準構造船・川船など、多種類の船のあったことが分りました。



■ 船材を転用した井戸



■ 井戸枠内遺物出土状況